OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

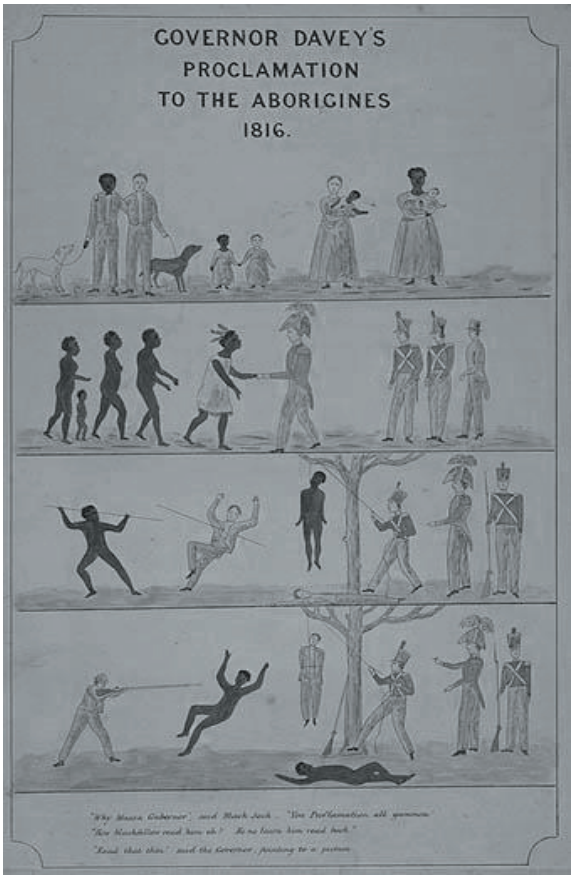
Title	フォーラム　白人性と帝国
Author(s)	藤川, 隆男; 酒井, 一臣; 原田, 一美 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2005, 2, p. 105-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フォーラム　白人性と帝国
Whiteness and Empire



Governor Davey's proclamation to the Aborigines, 1816
（National Library of Australia 所蔵 nla.pic-an7878675）

今回のフォーラムは、歴史学のみならず、社会学、文学、教育学、人類学、ジェンダー研究など様々な分野で、近年急速に拡大しつつある白人あるいは白人性の研究と帝国の関連を探った、国立民族学博物館の 2004 年 9 月 26 日のシンポジウムの概要を紹介する。前半では、報告の内容を、後半では全体討論の内容を扱う。紙幅の関係上、報告は要約にとどめ、討論も一部をカットせざるをえなかったが、白人性研究の理解の一助にはなるであろう。『民博通信』105 号の特集「白人と白人性」と併せて読むと有益である。

白人・白人性研究について、聞きなれない人も多いと思われるので、フォーラムの内容に進む前に、少しだけ説明しておきたい。アメリカには、黒人（アフリカ系アメリカ人）の研究、エスニック・グループの研究、アメリカ・インディアンの研究など、マイノリティと呼ばれる集団を扱った研究がこれまで無数にあった。オーストラリアやカナダでも先住民研究やエスニシティの研究は数多くある。イギリスでも同じような状況だ。しかし、これらにかかわるすべての人種関係のもう一方の当事者、白人にたいしては、研究の眼差しが向けられることはほとんどなかった。

白人性研究の立場からすれば、白人は普遍的な人間存在の象徴として、正常なもの、すべての人間の規準となるものとして存在したために、それ自体が問題化されることなく、観察の対象となることなく、見過ごされてきたのである。白人は常に観察者の立場にあり、規範の設定者として、マイノリティ問題を探求してきた。だが、このようなやり方は、明らかに限界に来ている。オーストラリアの先住民アボリジナルは、オーストラリアのみならず世界の学者によって観察され、研究されてきた。世界で最も徹底的に研究された集団であろう。しかし、アボリジナルの生活は改善せず、人種関係も緊張を高めている。

これまで無色透明な、普遍的存在として人種関係を決定していた白人という存在を、白人がアボリジナルを見てきたように、特殊な存在として研究の対象にしようとするのが白人・白人性研究である。マイノリティ集団について知ることは大切だが、同時に、差別を生み、差異化の根源となっている集団、近代世界の規範の根源に深く関わっている白人について理解することも、必要不可欠である。そういう観点から、白人研究は急速に拡大し、大学教育の一部としても取り入れられつつある。アメリカでは、プリンストン大学や UCLA を含む 30 を越える大学が白人性研究のコースをすでに開設している。

問題提起

藤川隆男

このシンポジウムは、民博の約 2 年にわたる研究会『世界における「白人」の構造化』の 1 つの区切りのシンポジウムですが、これが最後というわけではなく、12 月には刀水書房から出版予定の白人性と白人のテキストの原稿の完成、来年の夏休み明けには、研究成果の提出をお願いする予定です。

白人と白人性は、あらゆる近現代の歴史的問題と関連があると言ってもよいのですが、今日は帝国と白人性というテーマで、最近話題の多い帝国と白人性の問題を検討したいと考えています。第 1 セッションでは、イギリスに対してマイナーな帝国形成を目指した帝国として、日本、ドイツ、フランスをとりあげ、そこにおける白人形成、白人意識の形成を検討します。第 2 セッションでは、イギリス帝国の 2 つの白人植民地における白人性と帝国の問題をとりあげます。そのなかでは、帝国・国民国家、人種・民族などの問題が扱われることになります。さらに、第 3 セッションではポストコロニアル時代の白人性の問題を、映像文化や多文化主義との関連で論じていきます。政治的な帝国が解消した後の白人性の問題は、非常に大きな研究課題の 1 つです。3 部にわたる個別発表の後で、個々の発表に関する疑問点、今後、全体として検討すべき課題などを 1 時間あまり討議して、シンポジウムを締めくくりたいと考えています。シンポジウムは、ダイアローグの持つ知のあり方を反映させようと考えて、校正段階ではできる限り発言の修正をしないように、討論の参加者に要請しました。重複やそのままでは意味が理解できない部分には手を加えましたが、シンポジウムの状況を大体再現できたように思います。

第 1 セッション

天孫人種は白色なり――「日本人＝白人」論の意味

酒井一臣（日本学術振興会特別研究員）

日露戦争が開戦された 1904 年、自由主義経済の紹介者として当時を代表するエコノミストであった田口卯吉 (1855-1905) は、『破黄禍論　一名日本人種の真相』という本を出版した。その内容は、田口独自の古代史論・言語論などから、日本の天孫人種はアーリア人だと述べたものであった。しかし、一方で田口は同書の中で、身だしなみを整え日焼け防止をすることで、日本人の容姿は白人に遜色なくなるという、人種起源論とは次元の異なるレベルでも、日本人

の白人化を主張していた。合理主義的精神の持ち主であり、すでに社会的名声も得ていた田口卯吉がなぜそのような議論を展開したのだろうか。この報告では、先行研究をふまえつつ、田口の真意を探り、その議論が日本対外政策の展開を考える上でどのような意味をもっていたのかを検討した。

橋川文三は『黄禍物語』の中で、田口の議論を、偏狭な民族的優越感のないもので、日本人の屈折した人種観を率直に表明しているとして、一定の評価を与えている。他方、武藤秀太郎は、田口が政治的意図をもって便宜的に議論を展開しており、日本人の「自負心」を高めようとする意図があったとしている（武藤「田口卯吉の日本人種起源論」）。報告者は、田口に政治性があったことは明らかであるが、それがいかなるものであったのかを明らかにすべきだと考える。

日露戦争前後から、欧米諸国では黄禍論がさかんに唱えられるようになったが、日本に近代化を要求しておきながら、日本が成功しはじめるとバッシングされるという状況は、日本社会に強い反発を引き起こした。岡倉天心や森鴎外は、「欧米諸国こそ白禍である」（天心）・「白人の不安の現れである」（鴎外）として、黄禍論への義憤を抱いた。これに対し、田口の主張は、白人を相対化する鴎外や天心の議論とは異なり、どこまでも日本が白人に近づいていくべきだとするものであった。これは、福沢諭吉に代表される明治期の「開明的」知識人の考え方に連なるものであったと思われる。そして、福沢や田口の発想は、日本外交における対欧米国際協調主義の基盤となっていった。白禍を前にして、アジアの黄色人種同士で連帯していこうとする理想主義としてのアジア主義に対し、国際関係の力学から欧米世界と結ぶべきだとする現実主義としての対欧米国際協調主義が、日本外交の相対する方針として打ち出されることになる。こうしたことを前提に考えると、田口の人種論は、反白人の方針が高まりつつあった時期にあって、どこまでも欧米世界、すなわち白人との協調が必要であることを訴えようとする意図があったのではないかと考えられる。

日本が対外政策を進めるにあたり、欧米とアジアの狭間にあって、いかなる選択をなし得るのか。言い換えれば、強者に従っておけばいいと割り切るのか、道義的に白人社会に一言すべきであるのかという問題は、日本が白人をいかに捉え、どう位置づけていくのかという議論となって、現在まで引き継がれているのである。田口卯吉の人種論は、その意味で、1つの興味深い史料として価値をもち続けているといえる。

ヒムラーのアーリア人種観とその帰結

原田一美（大阪産業大学）

「ナチズムと人種主義」の問題においては、ヒムラーのアーリア人種観の考察が欠かせない。たしかに、ヒムラーは、ヒトラーやローゼンベルク、ダレーのように「体系的」な人種論を展開していない。しかし、ナチスの人種主義の場合には、それがたんなる「理論」や「思想」に

とどまらずに実践に移され、何百万人という人びとに直接、影響を及ぼしたことこそが重要だとすれば、こうした実践を統括したヒムラーの人種観をおさえておくことは、不可欠の作業であろう。

そこで、以下では、まずヒムラーのアーリア人種観の基本的枠組みについて述べ、ついで、彼の理想である「大ゲルマン帝国」の内容を検討し、最後に、「血の選別」が具体的にどのような形で実践されたのかを示したい。

Ⅰ　ヒムラーのアーリア人種観の基本的要素は、3点にまとめることができる。ただし、これらの考えはけっしてヒムラー特有のものでも、ナチス特有のものでもなかった。まず第1の要素は、アーリア人種とユダヤ人種の間の世界的闘争が人類の歴史を貫いているという観念である。このような考えはヒトラーがとくに強調したところであるが、その基礎にあるのは、闘争こそが歴史の原動力であるという社会ダーウィニズムである。また、アーリア人＝光の力、ユダヤ人＝闇の力という二元論も、すでに19世紀から広くヨーロッパ全体に見られた発想である。ただ、ヒムラーは、この二元論を「ヨーロッパ」対「アジア」の世界的闘争という形に拡大させている。

第2の要素は、アーリア人種（北方人種）が種々の人種のなかで、唯一文化を創造する力をもっているという観念である。しかし、同時に「退化」への危機感も伴っており、この危機感から、第3の要素である「血の選別」という発想が導き出された。

Ⅱ　ヒムラーの理想は、ドイツ人やゲルマン系の諸民族だけではなく、「種の類似した血」をもつ民族をもまとめ上げる「大ゲルマン帝国」の建設であった。もちろん指導的地位を占めるのはドイツ人であるが、ヒムラーは、他の民族の「ゲルマン化」ばかりか、ドイツ人自身の「ゲルマン化」をも要求した。そして、「大ゲルマン帝国」建設の前提とされたのは、とくに東方地域に居住するスラヴ系民族の追放もしくは絶滅であった。

Ⅲ　東方地域の徹底的「ゲルマン化」を実施するためには、住民の「人種的選別」（＝「血の選別」）が必要となる。ヒムラーは、ヒトラーの政権掌握前からすでに、彼の親衛隊員の「血の選別」に着手していた。選別の基準を精緻化するために、親衛隊内に「人種課」（後に「人種・植民本部」）が設置され、ここで働く「人種専門家」たちが親衛隊員を対象に試行錯誤を行いながら、選別基準を練り上げていったのである。

そして、この親衛隊内部の選別原理が、後に占領地域の住民に適用されることになる。まずは、ベーメン・メーレン保護領でチェック人の選別が行われ、戦争開始後には、ポーランドで、また独ソ戦開始後はソ連領でも、「大ゲルマン帝国」の建設に向けて、徹底的な「血の選別」が立案され、一部実施された。

以上のように、ヒムラー自身のアーリア人種観そのものは、社会ダーウィニズム、優生学、人類学的人種主義などさまざまな要素の寄せ集めであったが、彼の特異性は、こうした考えを真剣に実践に移そうとしたところにあったと言える。しかも、その際、多数の「人種専門家」の積極的な協力があったのである。

19 世紀フランス人種思想のなかのアラブ人

杉本淑彦（京都大学）

19 世紀初めのフランス自然科学界の大立者といえば、ジョルジュ・キュヴィエをおいて他にいないだろう。1819 年にはパリ大学総長にも就任した人物である。そんなキュヴィエの遺産に、人種三分類法がある。コーカソイド、モンゴリア、ニグロという分類である。のちにこれが、「白色・黄色・黒色人種」分類法へと直接つながっていくことになる。

キュヴィエの『動物界』（1817 年）によると、「われわれが属しているコーカソイドは、頭部の形の美しさによって他と区別され」、「もっとも広範囲に他の民族を支配し、文明化がもっとも進展している諸民族は、みなここから発生してきた」という。白人種優位の分類法だが、キュヴィエはアラブ人を「コーカソイド」のなかに数えており、しかも「コーカソイド」のなかでは優劣の序列化をおこなってはいなかった。

キュヴィエの門弟で 1831 年に科学アカデミー総裁になるアンドレ・デュメリルも、師匠の白人種観を共有している。『分析動物学』（1806 年）のなかでデュメリルは、人種を 6 分類し、その最上位に「コーカソイド、すなわちアラブ＝ヨーロッパ人」なるものを置いたのである。

このように、19 世紀初めのフランス自然科学界においては、アラブ人は白人種としてヨーロッパ人と一括りにされていた。しかし世紀半ば以降、自然科学の世界というよりは社会科学の世界で、アラブ人は白人種から排除されるか、白人種のなかにとどめられてもヨーロッパ人から分離されるようになる。その代表的な論客はアルチュール・ド・ゴビノーとエルネスト・ルナンだった。

『人種不平等論』(1853-55 年)のなかでゴビノーは、人種の本質的不平等性なるものを想定する。そして、文明を創造するエネルギーは白人種、とりわけその純粋種としてのアーリア人にあると仮構した。白人種をアーリア人（ヨーロッパ人）とセム人（アラブ人とユダヤ人）とに分けたうえで、つぎのように主張したのである――「人類史は、巨大な織物に似ている。人類の 2 つの下等種、つまり黒色人種と黄色人種は、木綿と羊毛の粗末な織地にすぎない。白人種中の 2 級集団が、絹糸をくわえて、その織地の肌触りをよくする。そして、白人種中のアーリア人集団が、繊細な金箔糸と銀箔糸でもって、何世代にもわたって織物に仕上げを施してきた」。

ルナンも、アーリア人対セム人という二項対立で白人種をとらえる思考法を共有していた。『文明史におけるセム人の寄与について』（1862 年）によれば、「アーリア人は、政治的軍事的才能において、ついで知力および合理的思考能力においてセム人を凌駕し」、「一方セム人は、一神教を確立するという使命を果たすや急速に衰微し、こうして、アーリア人のみが人類の運命の先導者の地位につくことになった」というのである。

フランスにおいては、19 世紀半ば、白人種観に大転換が起きた。それまでは単一体としてとらえられていたものが、優劣の差でもって階層化されるようになったのである。アラブ人がユダヤ人とともにセム人としてグループ化され、ヨーロッパ人の下位に置かれるようになった

この転換の背景に、フランスによるアラブ世界の植民地化があったことは疑いようのないことだろう。ナポレオン・ボナパルトを総司令官にフランス革命末期に断行されたエジプト遠征（1798-1801 年）が、白人種観のこの転換をまず準備し、そして、1830 年のアルジェ出兵でもって開始され 1840 年代末に達成されたアルジェリアの軍事征服事業が、この転換を完成させたと考えられる。

第 2 セッション

オーストラリアにおける「白人」の創造と大英帝国 —— 1870 年代から 1901 年までを中心に

村上雄一（福島大学）

オーストラリアにおける「白人」アイデンティティ創造に大きな影響を与えた組織として「オーストラリア出生者協会（ANA）」の存在が挙げられる。1788 年に英国によるオーストラリアへの入植が始まって以降、先住民であるアボリジナルの人口は激減し、1840 年ころまでに、「ネイティヴ」という言葉は植民地生まれの白人を意味するようになった。しかし、その言葉に特別な意味合いが持たされるようになるのは 1872 年ヴィクトリアに ANA が設立されてからであった。

ANA は 1880 年代から 1890 年代にかけて連邦結成運動を推進するようになると、多くの白人「ネイティヴ」の支持を得た。しかし、「オーストラリア出生者に限る」という入会資格や独自文化へのこだわりから、大英帝国に対して不忠ではないか、さらには完全な独立さえも目指しているのではないかと批判されることも多かった。それに対し ANA は、英国への忠誠をアピールし、あくまでも帝国内で国家として名誉ある地位を得たいのだと主張した。

このような主張をした背景には、連邦結成運動を推進するにあたって、常時、全体の 9 割近くを占めていた英国諸島（アイルランドを含む）からの移民の支持を得る必要があったからである。結果、両者に共通するアイデンティティとして強く主張されたのが「ブリティッシュネス」であった。

しかし、英国系移民とオーストラリア生まれの両者をつなぐ「ブリティッシュネス」は、限定的・抽象的なものであり、例えば、「英国的自由」を主張しながら、他方では有色人移民の「制限」を主張するなど、時には相矛盾するものであった。このような矛盾を統合する最も単純明快な象徴が「白人（特にアングロ・サクソン系）」という概念であり、そのため、本国の英国人以上に、オーストラリアの人々は「白人」という言葉に特別な意味を見出すようになっていった。

ANA に少なからず入会していたアイルランド系白人「ネイティヴ」や彼らの親の世代は、

総人口に占める割合が高く、政治分野においても進出が早くから見られた。また、多くのアイルランド系移民は奴隷や囚人、または、アボリジナルと職をめぐって争う必要がほとんどなく、その結果、「労働者階級」＝「白人男性」というカテゴリーに比較的容易に属することができた。そして、アイルランド系白人は、帝国の植民地発展は、彼らの貢献の産物でもあり、それゆえ英国がもつ権威や権力は彼らにも帰属すると主張することで、アングロ・サクソン系白人と同等な自由を享受することに比重を置くようになり、彼ら固有のアイデンティティはあまり強調されなくなっていった。

このように連邦結成運動と「ブリティッシュネス」や「ホワイトネス」は不可分の関係にあり、それが連邦市民権にも反映されるはずであった。しかし、1890 年代の連邦憲法制定会議において、市民権をどのように定義するかは棚上げされた。連邦結成を支持した多くの人々は、オーストラリアを「白人国家」とすることに異論はなかった。しかし、大英帝国という枠組みで見たときに、この「白人国家」という標語を憲法や法律で成文化することは、決して英国からの裁可を得ることができないのは明白であった。様々な人種・民族を抱えていた英国にとって、法に基づく人種差別は容認できなかったからである。単に「英国臣民」を「オーストラリア人」とみなすという案もあったが、英国に帰化した有色人も含まれることになるため、採用されなかった。その結果、1901 年に発足する連邦政府は市民権を憲法や法律で定義せず、「移民制限法」および「帰化法」を制定・運用することで、事実上「オーストラリア国民」＝「（アングロ・ケルト系）白人」を構築していくことになった。

20 世紀初頭のカナダ社会にみる白人性

細川道久（鹿児島大学）

米国と比べカナダで白人性研究が少ないのは、加米の歴史の相違に起因しよう。加米では、人口に占める黒人比率や奴隷制の影響が全く異なる。カナダでは黒人が少なく奴隷制が小規模な上、逃亡奴隷の「地下鉄道」となったことが、反奴隷制社会像の構築に寄与した。非米的自己像の形成も、黒人の存在軽視に繋がった。その他、英仏両系の対立が大きなウェイトを占めてきたこと、米国よりも長くイギリス領であったこと、カトリックよりプロテスタントのアイルランド人が多いこと、多文化主義（マルチカルチュラリズム）を反映してマイノリティ集団研究が盛んなものの、ホスト社会との関係を個々の集団について分析する傾向が強く、横断的に白人性と繋げるには至っていないことがあげられる。

白人と非白人の境界は、それを設ける主体、時代、地域によって異なる。ここでは 20 世紀初頭のカナダにつき当時の著作を手がかりとする。社会改良運動家ジェイムズ・S・ウッズワースの『我が門扉の中の異人』（1909 年）によれば、ヨーロッパ大陸に北東から南西に引かれる境界、即ち、スカンディナビア半島、イギリス諸島、ドイツ、フランスと、ロシア、オース

トリア＝ハンガリー、イタリア、トルコを隔てる境界が、地理上のみならず人種や文明の区分であり、プロテスタントとカトリック、代議制・主権在民政府と絶対王政、普通教育社会と非識字社会、工業・進歩的農業・熟練労働と原初的手工業・後進農業・非熟練労働、教養富裕農民と隷属的農民、チュートン人種とラテン・スラヴ・ユダヤ・モンゴル諸人種の境界であった。そして白人とは、英系と「イギリス臣民としての誇りをもつ」仏系、異人ながらも白人とみなされたドイツ人であった。また、鉄道建設キャンプの観察に基づくエドマンド・W・ブラドウィンの『飯場の人々』(1928 年) では、白人とは、英語系、仏語系双方のカナダ生まれ、イギリス諸島移民とアメリカ人を常時含み、通例はスカンディナヴィア人、時にはフィンランド人、また外国生まれであっても、能力を備えた者も含める。他方、異人とは、スラヴ人、レヴァント人、ユダヤ人、ドイツ人、イタリア人、東洋人であった。かかる区別は半ば人種的区別で公正さを欠くものの、職場の至る所で見られること、異人とは英語系労働者による汚れた重労働に従事する者の総称である等々、白人の境界の恣意性を指摘する。

白人の中心には英系（含、アイルランド系）が位置したが、白人の範疇から外れる者もいた。移民にせよ、すでに何世代も居住するカナダ人にせよ、望ましいとされた人々がもつ属性、それが白人性の主要素である。移民、カナダ人双方を対象とした社会改良運動が描く理想的人間像は、カナダでの白人性とみてよかろう。同運動が唱えたのは「社会の純潔」であり、精神・道徳面および人種的浄化であった。白人性とは、社会の暗部を照らす光の白さ、社会の白さであり、人種の白さでもあった。社会秩序と個人の自由の調和を特徴にもつアングロ・サクソン的価値（ブリティッシュネス）は、多様な人種を擁する国では重要とされた。かかる観点から、性欲を制御できるアングロ・サクソン人種と、野蛮ゆえに制御できぬ黒人や先住民が対比されたばかりか、不適切な英系（不健全な下層労働者や「白い奴隷たち」）も社会悪の根源とされた。またアジア人には、文明化（といっても古びて枯渇したとする）しているがため堕落しているという苦し紛れの理由が付された。英系社会を脅かしたのは、大平原地域では東欧・南欧移民であったが、アジア人と異なり、最終的にはアングロ・サクソン文化を基調とするカナダ社会に同化可能とされた。文明化の程度より肌の色が同化の基準であり、それに適わぬ者に対する入国拒否、異人種婚の危惧、断種法制定をみた。

総じて、白人性を規定したのはアングロ・サクソン的価値からの距離であった。白人には白人たることが求められ、異人であっても白人とみなされた。同時に、黄・黒・赤色の肌の人々と白人は大きく隔てられ、白人性は人種化されていた。加えて、景況も無関係ではなかった。カナダの白人性は、イギリスのヴィクトリア的価値観をひきずりつつ、米国とも共通する点が大きいが、英米との相違も検討する必要がある。加えて、英系と同じ北方人種で「建国の 2 民族」である仏系の白人性についても検討の余地がある。

第3セッション

アメリカにおけるメディアの白人性と表象

日吉昭彦（目白大学）

公民権運動後の1960年代から1970年代のアメリカでは、メディアのなかでアフリカ系アメリカ人の登場が極めて少ないという批判をふまえて、実証的な統計調査法を用いた内容分析研究が盛んに行われてきた。こうした研究は、メディアが作る社会的現実の現実性を問うもので、現実のアメリカ社会における人種構成の正確な反映や、エスニック・マイノリティの現実的な描写を、メディアに求めるとともに、その傾向や変化を明らかにしてきた。多くの研究が、1980年代までに、テレビでアフリカ系アメリカ人の登場機会が確保されてきたことを評価しつつも、その描写の仕方や姿勢については批判を続けてきた。批判を端的にまとめるなら、テレビのアフリカ系アメリカ人は、白人が支配的なメディアにおいて、白人のプロデューサーによって、白人の視聴者ために、描かれている、ということである。つまり、アフリカ系アメリカ人の描写を通して、映し出されていたのは「白人」表象であった、ということである。

近年、メディア映像表現の研究でホワイトネス・スタディーズが盛んに行われるようになってきている。こうした研究は、カルチュラル・スタディーズのアプローチなどを用いて、ディスコースを読み解く手法で、映像研究を行う場合が多い。一方、内容分析研究において「白人性」をテーマにすえた研究は皆無に近い。しかし、人種表現に関する内容分析研究が蓄積してきたデータと知見は、実はホワイトネス・スタディーズの研究者の言説と極めて親和性があるのである。

たとえば、内容分析研究は、その理論的背景として、観察学習を通じた社会化やアイデンティティ形成の理論などを用いている場合がある。メディアのエスニック・マイノリティの描写に「白人性」がみられるならば、メディアのオーディエンスの「白人性」が構築されていくだろうと考えるわけであるが、「白人性」が構築的であり、身体性を越えた「白人性」の存在などを指摘するホワイトネス・スタディーズと共通の知見を持ち合わせている。

内容分析研究は、時系列的な表現の変化を統計的に明らかにすることができる手法であり、公民権運動などの社会運動や経済構造の変化などの社会変動が、どのようにメディア描写に変化を及ぼしたのか、推論可能な手法である。ウーマンリブの時代には、白人女性のテレビでの表現機会の増加とともに、アフリカ系アメリカ人の女性や、その他のエスニック・マイノリティのテレビでの描写が激減していることを示す研究がある。これは、メディアが人種間覇権闘争の空間となったことを示している。また、人種というテーマに、フェミニズム的な批判言説が接合されたものとみることもできよう。このようにメディア文化の政治性や経済構造の変動を分析できる内容分析研究は、実はカルチュラル・スタディーズのアプローチとも類似したも

のなのである。

ところで、ホワイトネス・スタディーズで、映像メディアの登場が、白人アイデンティティの形成に、重要な役割を果たしたという指摘がある。映画が登場した時代に、視聴という集合的なコミュニティを形成する場は、ヨーロッパ系アメリカ人が、英仏のオーディエンスとともにアイデンティファイできる場であり、ウエスタン・オーディエンスは、グローバルな帝国的プロジェクトに参加できた、という議論である。

現在のアメリカのメディアには、支配的な価値観として文化的多様性の反映というものがある。内容分析研究も、こうした価値観に基づいて行われてきている場合が多い。映像流通のグローバル化のなかで、こうした価値観の広がりも見られている。こうした価値観に「白人性」が反映しているとすれば、グローバルなメディアのオーディエンスの「白人性」を構築していくことだろう。現在の日本で批判的にメディアの「白人性」研究をすすめる意義もおおいにあるであろう。

多文化主義と白人性 ――オーストラリアの多文化主義を題材として

関根政美（慶應義塾大学）

本シンポジウムでは、欧米列強白人による帝国主義の動きと非白人世界の植民地化の動きが世界的に展開する時期における、「白人性」の構造化・普遍化の問題が多くの報告者によって論じられた。それに対し、本報告では、19 世紀から 20 世紀初頭に確立した白人による世界的支配構造と、模範的生活様式の基盤となり白人の市民的価値を表象する「白人性」への疑問が強まり、従来、自明視されていたことから学問的に検討されることの少なかった「白人性」への関心が高まった 20 世紀後半に焦点を当てた。実際、20 世紀後半は、白人性あるいは白人文化を相対化するような多文化・多民族社会化と「多文化主義化」が進み、それは、白人性の危機を表すとする議論が盛んになった時期である。

1960 年代に白豪主義を廃棄し、1970 年代より非差別主義移民政策・多文化主義を採用したオーストラリアでも、80 年代より多文化主義論争がかしましくなった。早くは 1984 年のメルボルン大学ブレイニー歴史学教授によるアジア移民制限論争があり、この種の論争は、1996 年の連邦総選挙で下院議員に当選したポーリン・ハンソンが、アジア移民移住制限、先住民族福祉政策縮小、多文化主義反対などを旗印に、1997 年にワン・ネイション党を結成し、多文化主義論争を華々しく展開したときに頂点を迎えた。

これに対して、オーストラリアでは多文化主義を支持する国民の多くが非差別的移民・先住民福祉政策の維持を求めた。他方、こうした論争の発展は白人性の後退・動揺を意味するとの議論も聞こえはじめた。しかし、この点に疑問を差し挟んだのがシドニー大学の文化人類学者ガッサン・ハージ（Ghassan Hage）である。彼は、多文化主義者は一見非白人の文化を尊重し

白人性の脱中心化を進める「ものわかりのよい白人」に見えるが、その実は、多文化主義を道具として、国民国家における白人の支配的地位を堅持しようとする「ナショナリスト」だと批判する。多文化主義者は、彼ら・彼女らが認めうる範囲での文化の多様性しか認めないし、認める文化も博物館などに収められるような伝統的な飾り物のような「死んだ文化」のみであり、多文化主義政策への非白人による政策提言に耳を十分傾けないとする。故に、報告では、多文化主義は「福祉主義的な多文化主義」から、「経済合理主義的な多文化主義」へとその性格がシフトしていることについても論じた。

ハージ教授の議論には問題点もあるが、本報告では彼の「多文化主義が白人性あるいは白人支配の再構築の道具にされている」との議論を紹介しながら議論を展開した。白人性と白人の支配的地位は現実には動揺しているが、それを素直に認めようとしない白人の態度をハージは鋭く批判する。しかし、本報告では、多文化社会化の現実を前に、白人が自らの支配的地位の動揺を簡単に認めそうもないこと、また、白人のしぶとい抵抗は続くとし、簡単に白人性の終焉は起きないと論じた。それは、多文化主義はリベラルな価値観（文化・言語の自由・平等）を土台とし、それは白人が生みだしたものである以上、白人文化が第 1 義的な重要性をもち、リベラルな要素をどの程度もつかによって、他の文化を序列化することが可能だからである。

全体討論

問題提起

松山　最初に感じたことを 3 つに整理させていただきます。1 つは白人性と帝国というタイトルに関して、いわゆるポストコロニアルの潮流の中で、こういうテーマを選んだと思うんです。サバルタン・スタディーズやカルチュラル・スタディーズが議論している人種問題、あるいは端的にいうと、人種というのは存在しないという主張を、われわれはこの議論の中へどうやって取り込んでいくのかという問題がまずあろうかと思うんです。その主張を短く言いますと、人種は政治的・社会的に作られたものだ、生物学的に人種というものは存在しないということです。ぼくはこの意味が長い間わからなかったんです。なぜならコーカソイド、ネグロイド、モンゴロイドはいるじゃないかとずっと思っていたわけです。でも、そういう認識こそがおかしいんだ。そういう議論を白人性と帝国というタイトルのシンポジウムの中で、われわれはどう取り扱うのかという点があります。

もう 1 つは帝国と関わって、今なぜ文化ばかりが強調されるのかという問題だろうと思うんです。日吉さんがおっしゃったように、エスニックな問題から文化の多様性へというメディアの動きもそうですし、関根さんがおっしゃった、多文化主義でも、白人はなぜ、社会的でも政治的でもなくて、他者の文化だけを強調するのか。関根さんが言われたとおり、白人が与える

文化のイメージにしたがって、非白人はそれを具現化していく努力をしていく状況が見られます。関根さんの示したチャイナタウンの写真はその最たるものだと思うんですが。それは結局のところ、白人をターゲットとした自文化の主張でしかないんではないか。すなわち、ぼくたちは白人性の呪縛から逃れられていないんではないかという問題があると思います。この点にかかわって、新植民地主義、ここで言う帝国という議論が成立するんじゃないかと考えます。

それからカナダやフランス、ドイツの話から出てきたのは、白人の中の階層性というか、つまるところ白人とはいったい誰なのかという、白人の中の議論だと思います。その 3 つが僕の感じた主な点です。「白人性と帝国」というテーマのうち、帝国については直接の議論がありませんでしたが、私がさっき言ったような意味で帝国に繋がっていくのだろうと考えました。

人種の構築性

藤川　どうもありがとうございます。松山先生に 3 つ問題点を出していただいたので、それぞれについて考えたいと思います。まず、人種の構築性という問題について議論を深めたいのですが。たぶん、必ずしもカルチュラル・スタディーズという立場に立たなくても、人種やネイション、あるいはエスニシティが一種の社会的な構築物であるというのは、比較的広く受け入れられるように思いますので、研究の前提として考えていいのではないか、と私は考えていますが、そういう点について少し意見をいただければと思います。

松山　フランツ・ファノンが『黒い皮膚と白い仮面』だったかな、フランスの黒人の神経学者の方がそういうことを書いていますが、ああいう文脈では社会的に作られた人種というのはわかりますが、モンゴロイドもいるしコーカソイドもいるしネグロイドもいるというのを、全部社会的に作られたものとして否定していいのかなとぼくには吹っ切れないところがあります。

藤川　たぶんそれは、人種に限らずたとえば国民という領域でも同じだろうと思うんです。日本人は構築されたという話になると、日本人の構築性というのは多くの面で言えるんでしょうけれども、そうかといって日本人の素材になるようなものは、比較的簡単に指摘することができると思うんです。ただ、その日本人の素材や人種の素材になるものと、日本人とか白人と言われているものが表しているものとの間には違いがあると思うんです。

松山　それはよくわかります。たとえばイラク人やアフガン人やインド人は、普通白人とは言いませんよね。そういう意味で歴史的に作られているというのは非常によくわかります。彼らの社会が持っている、あるいは彼らの社会を構成している要素が非ヨーロッパ的という意味で白人と白人以外を分けている、だから社会的に構築したんだ、と。そういう議論はよくわかります。そういう意味ではヒムラーもそうではないでしょうか。

原田　現実にある黒い肌と白い肌と、あるいは黄色というかそういうものと、人種というものを理由にして、こういう人種はこういう性格だからヒエラルヒーのここに位置する、という場合の人種というのはかなり違うと思うんです。

松山　なるほど。

原田　そもそも、ヨーロッパで人種というものが大きな問題となってくるのは、やはりヨー

ロッパ人が作り上げた文化にかかわりがあると思います。細川先生のお話をお聞きして、社会の純潔を云々とか、道徳や宗教をかなり基準にしているということに、ああそうだなと感じたんですが、近代社会が市民的価値観を中心に築かれていく時に、その市民的価値観を最も体現するものとして白人種というものが想定されたわけです。現実の黒人の人たちは明らかにそういうところにいなかったのと、現実の肌の色の違いとその当時達成していた文化的なレベルの違いがかなりすんなりと合致したことで、肌の色に文化を投影するということが起こったのだと思います。実際ヨーロッパの人が言いたいのは、ナチスが言う文化的創造能力というか、文化的に自分たちのほうが上である、それを守りたいということだと思うんです。そういう意味では、人種が構築されたものであるのは明らかだと思います。だから、その時々で、ある民族はこっちに入る、それがある時期が来ると別のところに入れられてしまう、そういうことが可能だと思うんです。

市民社会の価値

酒井　白人の帝国性という話と関係して、どう作られたのかということなんですが、極端に言うと、私たちは市民的な民主主義社会のほうが、たとえば幕末の江戸封建社会よりは優れたいい社会だという、ひょっとするとこれも価値観かもしれなくて。

原田　ああ、それは明らかですよね。

酒井　人種性というか、白人が上だと思ったその最大の理由は、何よりもまず軍事的に強かったことだと思うんですよね。軍事的に強いというか、それに従わなければひどい目に合わされるという、ある種の強迫観念というか。実は、幕末にアメリカに行った幕府の使節たちは、ヴィクトリア朝的な価値観を見て、それを悪く言っているんですよね。野蛮人だと。礼がない、儀式もないと。身分差がないというのは、その当時の日本人から見て、まさに中国的な意味で礼のない国家であって、なんとアメリカは野蛮だと。つまり、今われわれが民主的だといっていることを見て、すべてこれは野蛮だと言っているわけですよね。

ところがこの後、日本が近代化をしなければならないと諦めて、一生懸命西洋化をするようになってくると、福沢諭吉をはじめ、あれがいいんであって、それがうまくできない黄色人種は劣っているのだと自分たちで言い出すという。この転換はなぜなのかと考えると、人種論ということだけでは割り切れない、もっと目に見える力もあったのではと思います。

原田　確かに軍事的な圧力も強かったと思うんですが、それだけじゃなくて、物質的な生活水準に対して、向こうのほうがいいのではと日本人自身が考えたんではないかと思います。単に民主主義というわけではなくて、現実的な生活ね。汽車も走っているし、さまざまな日常生活においても優れていて、こんな風になりたいと思ったんじゃないかな。

酒井　文字通り和魂洋才でいけると思ったみたいなんですね、ある時期までは。しかし、技術だけもらってくればいいかというと、その技術のもとにあるのがヨーロッパ文明の精神的な面なんだ、とだんだんと言い出すんですが。これも、私たちは福沢諭吉の議論なんかを読んでそう思ってきたわけですよね。それも本当にそうなのか、ということをもう一度考えれば、次

のステップに入るんじゃないかな、と。帝国ということに少し絡めれば、帝国という欧米諸国の持っていた現実としての支配の力ですね、この話と人種論の話とを密接にして議論したほうがいいと思いますね。特に私は外交史ですから。

松山　深めることになるかはわかりませんが、あの当時は混住か隔離かということで議論しますよね。外国人をみんなと一緒に生活させるかどうか、という。混住反対派の最大の理由は何でしたっけ。

酒井　西洋人はまさに礼のない国民で、一緒に住むと技術的に劣るのではなくて、日本人の中身が汚されるという、それが最大の理由ですね。実はこれは明治になっても延々と言われることです。

松山　日本人純血論だ。

津田　じゃあ入植した白人と同じで、白人と接触した日本人はそういう礼のない人種と接触することで堕落してしまうというか、そういう恐怖を味わったと考えていいんですか。

酒井　人種的結合、つまり結婚するなんて論外で、その 1 つ前の段階で、西洋の文化というのは商業の文化で、これは儒教文化から見たら最も卑しむべき文化なわけです。こういうやつらに日本の土地に住まれたら、その商業主義が広まってしまって、礼の国である日本が崩れるという議論で、ましてや混血にいたっては論外で、それ以前の問題ですよね。

村上　それもあるでしょうけど、怖かったのは経済力の格差というのも大きいですよね。日本経済が支配されてしまうんじゃないかという。

酒井　ただ、経済論については幕末の時代から、うまく貿易をすれば儲かるというのもあったんですが、それに対して必ず出てくる反対が、最後はそういう次元ではないという議論です。

リベラル帝国主義

関根　文化という点では、多文化主義を言いながら同時に白人性を維持するにはどうするのかが問題になります。多文化主義者の白人たちが考える文化は、エスニック文化ではなくて、リベラルな文化です。そういう価値観が白人の文化だと言います。たとえばカナダ人の場合、カナダ性はリベラルな自由・民主主義だという考えを確固として持ち、それがカナダ人だという訳です。白人とは言わずにカナダ人だと言うのです。オーストラリアでも最近は、テロ行為などが起きると、それはオーストラリア的でないアンオーストラリアンだと言います。十年位前はあまり言わなかった。ところが最近は、何かと悪い人間はオーストラリア的でないという。じゃあオーストラリア的って何かって聞くと、どうもリベラル民主主義を知っているか、知らないかで分けるらしい。そうすると多文化主義社会のカナダ人やオーストラリア人は、リベラルな要素をどれくらい持っているかで非英語系の文化を序列化できるのです。エスニック文化の違いで諸文化の良し悪しは言えないが、リベラルな要素が多いほうがいいに決まっている。あなたの文化はどうですか、と聞く。ブッシュがやっていることも同じだと思います。つまり、イスラム教の連中はリベラルな文化を知らない、だからわれわれが力ずくで教えてやる、というわけです。それは帝国主義的な行為だと言ってよいでしょう。まさに、「リベラル帝国主義」

などという言い方も可能かと思います。不思議なことに民主主義的かそうでないか、ということで差別してしまう。これをぼくは「リベラルな差別」とよく言います。

今までの差別は伝統文化の違いを取り上げた、エスニックな差別です。実は白豪主義をよくみると、日本人の扱いが問題なのです。彼らはアジア人だが劣等人種ではない。だけど民主主義的価値を知らないから、オーストラリアには入れないんだと言うのです。でも、アジアに民主主義国家ができてくると、何を言い出すかというと、「アジア人にだって民主主義は可能だ。ただ民主主義の生みの親は私たちですよ。だから、君たちには追いつけない」です。もし、白人性がリベラルな価値観を示し、それをオーストラリア的だとか、カナダ的だとか、アメリカ的だとか言いはじめると、最初に言い出した彼らが 1 番偉いことになる。1999 年のオーストラリアの包括的多文化主義の報告では、それに近い一文が入っているんです。「私たち、英国系の人々が生み出した自由と平等を謳うリベラリズムがあるからこそ、われわれは多文化主義を導入できたんだ。だから、われわれの文化には正統性がある」と言うのです。いま帝国を論じるときに、文化にこだわる理由はそこにあると思います。

松山　アボリジナルを研究している立場から言うと、それがまさに帝国性で。オーストラリアの多文化主義の中で、アボリジナルに対しては一定の文化イメージが与えられていて、アボリジナルはそれを実現しようとしている。白人が要求するアボリジナル文化イメージを彼らが実現することで、多文化社会の 1 つの構成集団としての権利の認知を受けている。非常におもしろいのは、そういう白人のアボリジナル文化イメージがどんどん理想化されていることです。つまり、ヨーロッパ人と接触する以前の文化イメージにいたって、両方とも大混乱して、そこまで多文化主義の中で言うのなら、アボリジナルはネイティヴ・タイトルを要求するぞ、という戦いになってきている。ぼくなんかは、アボリジナル、先住民にとって、オーストラリア政府は帝国的存在になると思うんですよね、それがいいとか悪いとかじゃなくて。

普遍的白人性

藤川　たぶん、原田先生が指摘されたような、白人の誕生というのが啓蒙主義的な人間像の誕生とほぼ平行して行われていて、啓蒙主義的な人間というのが白人男性を中心として構成されてくるわけです。リベラリズムであるとか平等主義の根源に、白人としての存在があるということが言えると思うんですよね。個人は、一方では国民という形で構成されてくるのでしょうけれども、他方でそういうリベラリズムのようなものの構成要素としての人間として、たぶん国民を超えたところにも存在し続けると思うんです。それが人種概念の特性であって、ネイション・ステイトの中に入りこめないような部分を持っていて、そういうものとしてずっと機能し続けると思うんです。ただ国民国家の形成期の 19 世紀と、今みたいな時期では別の形で機能していると思いますが。白人性の根源にあるものが啓蒙主義的な人間像と重なっている限りは、テロとの戦いみたいになってくると、それを支えるような人間性の指標みたいなものがそこに求められていく、ということがあるんじゃないでしょうか。それは多文化主義も同じで、その前段階を見ると非常に閉鎖的な白豪主義と対比されますけど、もう少し前を見ると帝国主

義も多文化主義ですから、多文化を認めながら帝国支配を実現していくというのは不可能なことではなくて、白人性は多文化を認めながら支配権を維持していくような装置としてずっと存在し続けているんだろうと思うんです。

ナチズムは白人性のもっている普遍的性質というのを究極に白人という身体に押し込めようとしたものです。白人というのは白人の身体を持たなければならないというのをどんどん推し進めてしまうと、ナチズムみたいになってしまいますよね。すべての白人性は典型的な白人のドイツ人が持たなくてはいけなくて、ほかの人間は所有してはいけないという言説を現実と一致させてしまうと、こういう二重性みたいなものに支えられているものが一挙に崩れてしまう。それは原田先生が指摘したように国民国家の破壊にもなってしまうし、結局は経済システムも破壊してしまう。ユダヤ人を殺してしまえば、労働力も知的技術も何も使えなくなる。それはすごいマイナスだけれども、そこまで進んでしまうわけですよね。ほとんどの国はその中間くらいで。オーストラリアなんかもその中間くらいで、先住民を全部否定しないで利用しつつというか。

関根　あんまり利用しなかったよ。

藤川　多文化主義もその典型で、あまり逆に行ってしまうとひどいマイナスになる。ハワードくらいまでならいいけど、ポーリン・ハンソンまで行ってしまうとその傷は大きいという。

関根　ハージはレバノン系キリスト教徒です。松山先生が指摘されたように、中華街に民主とか自由などと書かざるをえなくなってくるわけです。ハージは、エスニックな違いがあってもリベラルな要素を非英語系移民は身につけて成熟できる。そういう点でうまくやっているにもかかわらず、白人の一部があいつらは問題だ、問題だ、と言っているだけなんだというのです。さらにそれをメディアが報道する場合、うまくやっていることは報道しない。その結果、白人が管理することが正当化されてしまう。けれども、エスニックな違いがあっても民主主義を理解できると言ってしまうと、ハワード首相は喜んで、リベラリズムを生み出したわれわれの文化は最高だと言うのです。ぼくはやっぱり民主主義はいいことだと思うけれども、白人は自分たちが生み出したということを持ち出して、文化は平等だけどもそれでも差はあるよね、という言い方をするわけです。

松山　だけど、成熟と言う概念は極めて危険な概念だよね。つまるところ、白人の中産階級以上の人が言う成熟を私たちは享受しなければならない、という構造。それを帝国と言うか新植民地主義と言うか。

酒井　関根先生に少し質問なんですが。私はこういう研究会に出ていながら、こういうテーマに疑問があって、ガッサン・ハージの議論はわかるんですが、管理したがる白人に態度を変えろと説得するのは難しいのではないでしょうか。

関根　その通りですが、ぼくは最近ひさしぶりにオーストラリアに行って、多文化主義の議論なんか必要ないと思いました。アジア人は勝手に多文化やっているからね。現実を見ると、白人がどう管理しようとしても、白人以外の人々がもう沢山いる訳です。その人たちが街の景観を変えています。駅を降りるたびに文字が読めないのです。カブラマタなんかはベトナム語

とタイ語と中国語ばかりでしょう。英語が時々あるから、ここはオーストラリアだと分かります。シドニーの西側にかたまっていたアジア人が、北の高級住宅地にも入りだしています。

そこにはそれなりの問題があるけれど、うまくやっています。ドラッグの問題が一部にあるけど、その問題はとくに白人に比べて悪い訳ではない。こういうことからハージは、彼ら・彼女らはうまくやっているという現実を認めずに、大変だ、大変だと言うなと白人に対して言うのです。管理したがる白人は統治主体としての威厳を示すために、非英語系住民は問題だ、リベラルな価値を知らないアンオーストラリアンだ、という議論を常に言説として再生産しています。その結果、多文化主義は大変だ、となる。こういう構図があることをハージは認識すべきだと言うのです。

白人の階層

藤川　いま白人性と帝国の文化の話が出てきたわけですが、松山先生が第 3 のポイントとして挙げておられた白人の階層性に話を移したいと思います。白人間のさまざまな集団の必要性というか、そういうものをどう考えるのかというところで、何か意見をいただければと思います。

山田　白人性の裏に啓蒙主義と言いますか、リベラル・デモクラシーみたいな価値観が入っている点では、アメリカは建国した時点でそれを国家として担っているわけで、出発の時点から関係しているんですよね。建国したときから、外国生まれで帰化できるのは白人のみということを規定しているというのは、先ほどの議論に関係しているのかなと聞いていました。細川先生と村上先生の発表で、ネイティヴの話が出てきましたよね。つまり、自分たちをネイティヴとして捉えていくということがありますよね。これが帝国というところと繋がるのかな、と。つまり、植民地をつくって出て行った人たちが自分たちをネイティヴとしてどう自覚していくのかということと、その過程には当然先住民や黒人、後で来た移民との接触という問題があるんですけれども、これと白人性の確立みたいなものとを考えて説明しなければいけないな、というようなことを思っていたわけです。

それでいくと、いわゆるヨーロッパ系の白人について考えてみたときでも、時差があるんですよね、到着する場合の。アメリカ合衆国にヨーロッパから来た場合は、入国した時点で帰化する資格みたいなのが取得できるわけですけど。ネイティヴの、アメリカ生まれの重要性と、エスニック・マイノリティの階層性との間に何か関係はあるのかなと考えていたところです。ヨーロッパ以外の移民の場合は、1 世は帰化できないですよね。ただし、アメリカ生まれであれば帰化資格は生まれるので、そこにネイティヴであることの意味が浮かんでくるんですよね。帰化できるということは、最低条件としての市民権を認めてやろうと。アメリカで生まれればそれは東洋人であろうと認めてやろうと。ただ、そこまでと言えばそこまでで、白人と結婚できるかといえばそれはできないという状況が、1960 年代くらいまで続くわけです。

細川　ネイティヴの話なんですが、カナダでは植民地形成から連邦結成までは、かなり若い人たちが移民してきているわけです。カナダの初代首相のマクドナルドは移民 1 世なんですね。そういう人が関わっている。そういう意味では、ネイティヴという意識はなくて、むしろ 19

世紀の末からナショナリズムとの関係で、もちろんブリティッシュ・インペリアリズムとナショナリズムは緊密に接合していたわけですが、次第にイギリスと距離を置いていくなかで強く出てくる。19 世紀の末くらいに、1 番初期にカナダにやってきたイギリス系や、アメリカ革命のときにやってきたロイヤリストとか前からいる人たちが、自分たちが生粋のカナダ人である、と言うわけです。数世代後ですね。そのあたりからネイティヴという言葉を使い始めたり、自分たちはロイヤリストの子孫だとか言うわけです。ただ、それは閉鎖的というわけではなくて、後から来たイギリス人移民にもかなり開かれたものなんです。うまく整理できませんが、ネイティヴとかイギリス系移民というのは、カナダの中で 1 番主流になるんだ、自分たちこそがイギリスにいる人々よりももっとブリティッシュなんだ、という意識を強く持っている人々なんですよね。彼らは帝国貢献、つまりインペリアリズムを通して、ナショナリズムというかネイションを形成していく担い手であったものですから。その中で先住民などのヒエラルヒーが作られていく。そういう意味では、ブリティッシュ・エンパイアとかブリティッシュネスとの距離感というか、それがヒエラルヒーを形成していったと言えると思うんですよね。もう 1 つはイギリスから来た移民が社会を形成するときに、無階級の社会じゃなくて、イギリス社会のミニチュアを目指した点が重要です。イギリス帝国は、あまりこういう言い方をしませんが、多文化の社会を作っているわけです。そのミニチュアを自分たちが作るんだ、と。そうなると自分たちが最初に来たわけですし、イギリス系の文化がトップにあって、東欧系や南欧系は中間に位置するとか、黒人や先住民やアジア系は下の方に位置するという形になるわけです。先ほどの帝国に戻るんですけど、イギリスの帝国のヒエラルヒーを植民地社会でも再生産しようという動きがあったと思うんです。

松山　村上さん、オーストラリアでもそうじゃないんですか。

村上　もちろん、オーストラリアに入植したときのモデルというのは大英帝国ですから。話は飛びますが、ぼくが興味を持っているのは、イギリス本国にいる白人じゃなくて、オーストラリアやカナダの本国から離れた人のほうが逆に白人性に価値観を見い出す。それが逆輸入というわけではないですが、本国に戻る。イギリスの研究者の本で読んだのですが、イギリスで白人云々が取り沙汰されるのは、1910-20 年代ですかね。イギリスから白人性が来たと思いがちですが、それはオーストラリアやカナダとは違う視点で見ないといけないんじゃないかと思います。

原田　話を聞いていますと、オーストラリア、カナダ、アメリカというのはヨーロッパにおいて白人を意識するようになるきっかけと違うな、と感じますね。たとえばリベラルであることが白人性と結びついて云々ということを議論されていますが、とりわけ 19 世紀末からということもあるのでしょうけれども、ドイツなんかでは、白人性の中心的な価値観というのは違うんですよね。勤勉であるとか、いわゆるウェーバーのプロテスタンティズムの倫理というか、ああいうものが白人性と結びついていくので、リベラルというのは二の次だろうと思うんです。

藤川　それはリベラルという言葉の意味が、オーストラリアでは普遍的な政治家たちの立場を表すところにも違いがあるのだと思います。自分をリベラルでないと言う人はいなかったと

いうか、リベラルというのは良いという感じがありますよね。

白人性の階層性の問題に戻りますが、エティエンヌ・バリバールやウォーラーステインの議論によると、エスニック・グループの存在というか白人内の階層化の問題というのは、経済的な問題とされます。白人内における搾取・被搾取の問題があって、支配をする白人のなかでも支配をする集団と支配をされる集団を生み出すのに、白人内の階層化というのはいいのだ、という議論をしているわけですよね。たぶんそれは、19 世紀のアイルランド人の白人化については当てはまるだろうと思うんです。アイルランド人は白人となることによってアイルランド・エスニック・グループから脱出していくというか、経済的なステイタスを上げようとする動きとして理解できると思うんですけど。それを 20 世紀の、新しいエスニシティの勃興というか、再構築の時代にはなかなか当てはめにくいんじゃないかなと思います。エスニシティを構築しようとしたのがエスニシティの側であるという問題が出てきて、その場合エスニック・グループは、経済的に言うと搾取されるために自己構築しているのかという問題が生まれてくる。

しかもそれがさらに白人化する。女性解放運動やいろいろなエスニック・グループが黒人運動を発端に自己主張を強め、集団化が進んでいく、と一般的には理解されると思いますが。そういう理解すると、全体的な説明としっくりこないなという気がします。エスニシティの時代を考えていく上で、19 世紀のエスニシティと 20 世紀のエスニシティの間に大きな違いはあるんでしょうかね。簡単に答えは出ませんね。

人種概念の転換

永原　私は南アフリカの人種を研究していますが、南アフリカでは人種の構築性というのは当たり前というか、それなしには全てが考えられない世界だと思うんです。そのなかで、オーストラリアやカナダで出てくる問題の要素が入っているのだと思います。いわゆるボーア人、アフリカーナは最初から先住民と混血して出てくるわけで、アフリカーナなんていう言葉は、まさしくネイティヴにあたるアフリカ生まれの人という言葉として使われていました。19 世紀初めくらいまでは、アフリカ生まれの黒人も含めたアフリカーナという言葉の使い方があるわけですけど、それが 19 世紀の後半になると人種的な要素が前面に出てきて、白人であるところのアフリカーナというのが 1 つの民族概念になっていくわけです。

それというのも、もう 1 つのイギリス系の白人がいるから、それとの対で出てこなきゃならない。先住民との関係という要素と、もう 1 つは、カナダとある意味で似ているのですが、いわゆる白人、ヨーロッパ系の人々のなかにも 2 つのグループがある、そういう競合関係のなかで、全体としては南アフリカの人種関係をリードしていくアフリカーナの人種観は、そういう構図の中で出てくるんですね。先ほどオーストラリアのお話を伺って非常に面白かったのが、白豪主義オーストラリアでは、出生地主義的なシティズンシップの考え方なんですが、南アフリカの場合は血統で全部いってしまうわけですよ。みんな血が混ざっているというのは百も承知なのに、ひとたび白人と分けられた人たちは、それ以外の人と結婚してはいけないとか、性的関係を持ってはいけないとか、法律で決めてやってきたわけです。フィクションだというの

は皆知っているのに、そのフィクションがないと社会が成り立たないように作られていく。

おもしろいのは、今それがひっくり返ってきていて、黒人政権ができて以降、昔の白人性にしがみついている人もいるわけですが、自分のルーツをたどっていくと先住民の血が混じっているということを、ある意味で売りにする白人が出てきているわけです。先住民性ということに付加価値が出てきて、自分たちが今この場所にいることの正当性だとか、土地を持っていることの正当性だとか、政治的な正当性、そういうものを得るために、自分たちこそ最初から血が混じっていたと主張する人が出てきていて。そういう意味では、人種の概念がガラガラ動いていて面白いところです。

オーストラリアやカナダ、あるいはアメリカと似ている一方で、違うのは、なんと言ってもヨーロッパ系が圧倒的にマイノリティであるということだと思います。数のうえで 1 割から 1 割ちょっとという人が先住民との関係でやってきたというところが 1 番違うんだと思います。原田さんの話と関連させて言うと、先に来ていたアフリカーナというかボーア人の人種観とイギリス人との白人意識との違いを言えば、イギリス人は啓蒙主義的な自分達の普遍性みたいなところで白人の優越性を言ってくるのに対して、ボーア人はよく言われるように選民思想ですから、そういう普遍的なものは持っていないわけです。それはとてもドイツと似ているなあと。南アフリカの隣のナミビアは、第 1 次世界大戦前にはドイツの植民地だったわけですが、そこではドイツ人がマイノリティとして先住民との対決の中で形成した人種観があって、それが後のアパルトヘイト的な人種観とかなり繋がっていると思うんです。さらに彼らが本国に帰っていったときに、それがナチスの人種論のイデオローグになるっていうつながりがあって。さらにそのナチスのイデオロギーが、1920-30 年代の南アフリカの人種論に逆輸入されるっていうような繋がりもあるので、植民地的な状況とナチズム的な人種論とが重なり合いながら、白人意識みたいなものができてくるっていう関係をすごく感じてたんですけど。

上山　白人性から除外されたアラブ人なんですが、彼らがどう考えていたかということを少し。ヨーロッパと対決的な議論の中で、ナショナリズムを越えるより大きな認識の枠組みを求めるなら、彼らにとってはやはり宗教ということになるかと思います。イスラーム教徒に対するヨーロッパのキリスト教徒という、ある意味ストレートな理解です。人種などではなく、宗教の違いとして理解する立場とでも申しましょうか。

松山　取り残した問題として、私が気になっているのは、スペイン系の人たちが南アメリカに植民したときに、ぼくのイメージですが、先住民というか現地の人との通婚がイギリス系の人よりも頻繁ではないかなということです。そういうスペイン人系の人の動向についての議論も残っていると思います。以上です。

藤川　松山先生にしめていただいたところで、今回のシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。